ぶらんこ（一幕）

岸田國士

青空文庫

夫
妻
夫の同僚

茶の間　朝

妻　（チヤブ台の上に食器を並べながら）あなた、さ、もう起きて下さい。
夫　（奥より）起きてるよ。一体何時だい。
妻　毎朝、わかつてるぢやありませんか。
夫　そんな時間か。
妻　いやね、どんな時間だと思つてらつしやるの。
夫　（跳ね起きるらしく）さうか。（間）カマキリは、まだ来ないだらう。
妻　（あたりに気を兼ね）およしなさいよ、そんな大きな声で……。
夫　（現はれる）昨夜はね、素敵もなく面白い夢を見たよ。
妻　（相手にならずに）歯磨のチユーブが破れてるから、気をつけて頂戴。
夫　（台所へ行きながら）鼠は出なかつたかい、昨夜は。
妻　（相変らず膳の上に気を取られて）あなた、昨日の朝、何処へお置きになつたの。昨夕お湯へはいらつしやらなかつたし……。
夫　（楊子を使ひながら）今日は、一つ、風呂へはいるかな。
妻　もう駄目ね、一昨日の牛蒡は……。
夫　さあ……。おれも、今迄、いろんな夢を見たが、これくらゐ不思議な夢を見たことがない。

（間）

妻　実に愉快な夢なんだ。
夫　手拭はあつたの。
妻　あつた。
夫　夢だからつて馬鹿にはできない。おれが、かう云ふと、お前はすぐに、夢があてになるもんですかと来る。
それや、夢で金持ちになつたからつて、何も、ほんとに、金持ちになると限つちやゐないさ。
そんなことを、あてにする馬鹿があるもんか。

（間）

夢は、どこまでも夢さ。
それでいいんだ。
ところで、夢といふやつは、空想とは、また違ふんだ。
夢は、やつぱり、一生のうちで、実際に在つたことなんだ。
眠つてゐる間に、ちやんと起つたことなんだ。
妻　葱が煮え過ぎても知りませんよ。
夫　葱……今日は、葱の汁か……。
さうか。

（顔を洗ふ音。やがて、手拭で顔を拭きながら現はる。妻は、入れ違ひに、台所から釜を提げて来る）

妻　お櫃をもう一つ買ふのね。

夫　（手拭を釘に掛け、長火鉢の前にすわり）煙草を一つぷく喫ひたいな。

妻　いいわ、時計と相談してね。

夫　（煙草に火をつけながら）まだ大丈夫。（外を見るやうにして）好い天気だな。

（間）

つまり、夢に対するおれの興味は、夢そのものの面白さに在るんだ。

妻　（飯をよそふ）

夫　夢は、おれを退屈さから救つてくれる。

夢は、おれに、人生の木陰を教へてくれる。

妻　（汁をつける）

夫　昨日と今日……今日と明日……その間に、おれは金のかからない旅をする。

楽しい旅だ。

おれに取つて、夢は、現実の一部なんだ。

希望だとか、理想だとか……そんな空虚なもんぢやない。

妻　（箸を取り上げ）あなたは、よくさう、夢が見られるのね。

夫　羨ましいか。そこで、昨夜の夢だが……（箸を取る）

妻　その前に、此の間の出張手当を、早く取つて来て頂戴。

夫　あ、さうさう。九円七十銭……こいつこそ、夢でもいい……

と、思ふのは間違ひで、今日は、是非、取つて来る。

（沈黙）

妻　今朝は、卵なしよ。

夫　どうして。

妻　買つとくのを忘れたの。

夫　よし、さう出なくつちや……。

「忘れた」

何んといふ好い言葉だ。

一切の醜さ、一切の暗さ、一切の苦しみ、恐ろしさを覆ふ言葉だ。

忘れてくれ、忘れて……何もかも、忘れてくれ。

妻　（きまりわるさうに）あら、ほんとに忘れたのよ。

夫　ますますいい。（間）それに、今日の飯は、上出来だ。

妻　（強いて笑顔を作り）炭がね……。

夫　（妻の顔を見て）あ、ほんとだよ。

妻　さう？　……（涙ぐむ）

夫　馬鹿、馬鹿……お前は、夢を見ないから、いけないんだ。

たまに見れば下らない夢しか見ない。

妻　だつて、どんな夢が面白いんだか、わからないんですもの。

夫　なるほど、いつか話した夢は、あんまり込み入つてて、お前にはわからなかつた。

わからなかつたから、面白くなかつたんだ。

昨夜のは、きつと、わかる。わかるやうに、話してやる。

お前は、おれの妻だ。おれが、どんな夢を見たか、

それくらゐのことは、知つてなけれや。

妻　（夫の茶碗を取り、飯をつける）たくさんつけてよ。

夫　おい、おい。

妻　また、お昼までに、お腹が空くわよ。

夫　（茶碗を受け取りながら）それは、まだ、おれが小さい時分のことらしい。

小さいと云つても、十六か十七……
変に世の中が寂しい頃だ。
（間）
いつも云ふ通り
おれには、友達といふものが無かつた。
遊ぶと云へば
一人で
蜻蛉を捕るか
冬なら
日の当る裏山の斜面で
遠くの森を
毎日毎日
絵にかく——
それが楽しみだつた。

妻　いやよ、そんなに、お醤油（したぢ）をかけちや。

夫　おれは、子供の時分、よく醤油を、飯にかけて食つたよ。

妻　毒だわ。

夫　お前は、何んでも、毒にしちまふね。
そこで、その夢だ。
おれは、あてもなく
その森の中へ、はひつて行つた。
毎日、絵にかいた、その森さ。
夜なんだよ。それがね。

妻　それより、こつちのが漬かり加減よ。

夫　夜なんだ。それが……
奥へはひつて見ると
森は——その絵にかいた森は
とてつもなく、大きな森なんだ。
露西亜か、南米か……
そんな処に在りさうな
人跡未到の大森林さ。

妻　（何か云はうとする）

夫　まあ、黙つて聴いてろ。
夜なんだぜ、それが……。
おれは怖いとは思はなかつた。
ちつとも怖いとは思はなかつた。
ただ、むやみに、悲しかつた。
おれは、不図、自殺を思ひ立つた。

妻　もう沢山、そんな話は……。いいの、あなた、そんなにゆつくりしてゐて……。

夫　いいから、しまひまで聴け。
自殺を思ひ立つた。
そこで
一本の樹の枝を見つけて
それへ帯をひつかけた
頭の上で、その両端を結びつけ
いよいよ
首を吊らうとしたんだ。

妻　（顔をそむけ）あなた！

夫　いいか

するとだよ……
　すると、誰かが、後ろから、おれの肩を叩くぢやないか。
妻　人がゐたの。
夫　人なもんか。可愛い娘さ、それがね、十二三の……。
　笑ひながら、おれの顔を見てるぢやないか。
　（間。妻は夫が膳の上に置いた茶碗を取つて再び手に持たせる）
見てるんだよ。
どつかで会つたことがあるなあ——
さう思ひはしたが、どうしても思ひ出せない。
妻　あとで、わかつたの。
夫　待て待て。
　（急いで飯をかきこみ）
すると、向うから、馴れ馴れしく
——何にしてるの——つて訊くんだ。
おれは
ブランコをこしらへてるんだつて云ふと
——ぢや、一緒に乗つて、遊びませう——つて云ふから
おれは
帯が、これぢや、短か過ぎるつて云つたんだ。
妻　（吹き出す）そんな……。
夫　（真面目に）さう云つたんだ。
　（間）
すると
——そんなら、あたしのを繋ぎませう——つて
メリンスの、赤い帯をほどくんだ。
妻　（笑ふ）いやよ。
夫　ほどくんだよ。
　（間）
仕方がないから
ブランコをこしらへて
二人で乗つたよ。
　（間）
木の幹がぐらぐらツと揺れる。
頭の上で、だしぬけに、けたたましい羽ばたきが聞えたと思ふと
……森中の鳥が、一どきにガヤガヤと啼き出した。
二人は
思はず、ブランコの上で抱き合つたさ。
妻　（やや暗い顔になり）もう、お茶……？
夫　お茶だ。
　（間）
お茶だけれど……
それから先さ、面白いのは……。
妻　ぢや、その先は、今夜ね。もう、靴を穿く時間よ。
夫　今日は、ブルドツクにしよう。磨いてあるね。
妻　（起ち上つて洋服を出す）
夫　（それとなく、妻の方を見ながら）その時だよ、その娘の顔を、よくよく視たのは。
わからない。が……誰かに似てるんだ。
どこかで見たか、会つたか、話しをしたか……。

妻　（靴下を検めながら）今日は、何処へも上らないでせう。
夫　上らない……つもりだ。む、待つてくれ……よし、上らない。
兎に角
何時か、何処かで、どうかした女なんだ。
誰だと思ふ。
妻　わかつてますよ、そんなこと、さ、また、待つて頂くのは、お気の毒ですわ。
夫　誰だと思ふ。
妻　誰でもよござんすよ。
あなたは、いつでもよ……朝の忙しい時に限つてそれなんですもの。
晩なら、もつと、ゆつくりするでせう。
夫　ゆつくりする。
しかし、もう、印象が新鮮でない。
頭の後ろの方が、まだ、夢に漬かつてゐるやうな朝の気持……
こいつは、晩まで、もたないよ。
事務所の、埃臭い空気を吸ふと、もう駄目だ。
恐ろしいものさ。
帰つて来て、お前の顔を見ると、それや、元気は出る。
元気は出る……が、ただそれだけだ。
お前は、あんまりはつきり見えすぎるよ。
（間）
しかし、もう着換へる。
カマキリの奴、今日は遅いぢやないか。
（茶を一と息に飲み干し、起ち上つて、着物を脱ぎ始める）
妻　（手伝ひながら）もう、これぢや暑いわね。
夫　（喉の奥から妙な声を出して唱ふ）
タラ　ラ　ラ　ラ　ラア
タララ　タララ　タララア
タララ　ラ　ラ
タララ　ラ　ラ
タラ　ラ　ラ　ラ　ラア
妻　（服の塵を払ひながら、優しく放げ出すやうに）
何を無茶苦茶歌つてるの！
夫　無茶苦茶だ？
自分が知らない歌はなんでも無茶苦茶か、
（間）
処で、お前は、わかつてると云つたね。
その娘が、似てゐるといふ女は、誰だ。
をかしいぢやないか……。
だつて、おれが、お前を始めて見たのは、お前が幾歳の時だ。
十九か……
いや、二十か……
さうだね。
お前が十二三の頃は、どんな顔をしてゐたか、それが、おれに、わかる筈はないぢやないか。
妻　写真を見たでせう。
夫　さうか……
なるほどね。

お前は、また、恐ろしく、落つ着き払つてるね。
痛快だよ……しかし……
疑ひも、そこまで、無くなれば。
序に、おれが、どんなに幸福かといふことも信じてほしいね。
妻　あたしも……幸福よ。
夫　うまい、うまい、その調子……。
（間）
いいかい
その娘が、どこか、お前に似てるんだよ。
いいや、それより、お前そつくりなんだ。
つまりお前なんだ。
しかし、そこが、夢の面白い処さ。
おれは、さう気がついて、驚きもしなければ、まごつきもしない。
十六のおれは
十二のお前を抱いて
悠々
ブランコの上で夜を明かした。
妻　はい、チヨツキ。
夫　ブランコは
力を入れないでも、楽に漕げた。
（間）
房々したお前の髪の毛が、前にかがむ度毎に、おれの顔に、もつれかかる。
お前は、それが面白いと云つて、わざわざ顔を近づけて来るんだ。
妻　（笑ひながら）まあ……。
夫　ブランコは
ひとりでに、揺れてゐるやうだつた……。
（間）
木の葉を漏れて来る薄明りが
仰向くたんびに
今度は
お前の顔を銀色に染めるんだ。
おれは
貪るやうにお前の眼を見つめた。
……お前は、やつぱり、笑つてゐるんだ。
妻　（夫の肩に頭をもたせかける）
夫　が、やがて、お前は、うとうとと眠り出した。
おれも、うとうとと眠り出した。
（長い沈黙）
それから先は、お前が知つてゐる通りなんだ。
勿論、世界は、丸で違ふさ。
（間）
さうさう、覚えてるかい……
あの翌朝、おれたちは、すぐ、この家へ引越して来たね。
なんだ、これや（部屋ぢうを見廻す）
これでも、人間の住む家か……
人間が愛し合ふ家か。
（間）
処が、昨夜はさうぢやないんだ。
森だと思つたのは、宮殿さ。

ブランコのつもりでゐたのは、やはらかな、あたたかい、天鵞絨の吊床なんだ。

妻　吊床つて、なあに

夫　吊床を知らないのか。吊床さ、そら……大人の寝る揺籃さ。

妻　宮殿なの……？

夫　うん……。

その宮殿が、決して、ありふれた、お伽噺式の宮殿ぢやない。

（外の格子戸が開く音）

声　おい、まだか。

妻　（惶てて夫の肩より離れ）それ御覧なさい、また遅れたわ。

夫　（惶ててチヨツキの釦をはめながら）いやいや、遅れない。（大声にて）なんだ、やつぱり行くのか。今日は休むのかと思つてた。

声　どら……。

（声の主、茶の間に首を出す）

妻　あら、いけません、こんなとこへ……。

同僚　おや、もう、帰つて来たのか。や、奥さん、お早う。

妻　いくらせかしても、これですの。

夫　丁度いい。まあ、話の先を聴け。その宮殿と云ふのが、決して、ありふれた、お伽噺式の宮殿ぢやないんだ。

妻　（上着を着せながら）そこは違ひますよ。もつと上……。

夫　宮殿といふ言葉は悪いかも知れない。一切の装飾が、ただ、住むものの為めの装飾なんだ。

同僚　面白いぢやないか。しかし、さういふ装飾があり得るかね。

夫　あり得るさ。第一、吊床が奇抜なんだ。そのブランコさ、つまり……。

同僚　どのブランコ……。

夫　どのつて……。

妻　いやな片桐さん、ほん気になつて聞いてらつしやるわ。（夫に）およしなさいよ、もう、あなた。

同僚　一体、何の話だい。

妻　夢なんですよ、この人の……。そら、例のですよ。

（夫にハンケチ、時計、金入などを渡す）

同僚　なあんだ、さうか。

夫　君は、しかし、夢の面白さがわかる男だ。ただ、自分では、一向、見ないやうだね。

同僚　見ない。処で、奥さん……。

夫　君は、ブランコに乗つたことがあるか。

同僚　ないよ。実はね……。

夫　よしよし、その話は後で聴く。昨夜の夢といふのはかうなんだ。

（巻煙草に火を点けながら）

おれが、まだ、十六七の頃……世の中が、変に、かう、寂しい頃だ。

（玄関の方に行きながら）

それでゐて、いろいろの事を、知るともなしに、覚える頃だ。

（姿が消える）

同僚　実はね、君、弱つたことになつたんだ。

夫の声　弱ることはないぢやないか。

妻　（玄関に出る）

同僚　（起き上がらうともせず、言葉つきは夫に、心持は妻にと云つた具合に）いや、それがね、急に、国から、おやぢがやつて来るつて云ふんでね。やつて来るのは、かまはないが……。

夫の声　さ、行かう、行かう。

同僚　行くさ。そこで、どうでせう、奥さん、今晩だけ……。

夫の声　いいよ、いいよ、どうにかなるよ。さあ……（同僚の手を引張るらしく）おれの夢を聴いてからにしろ。

同僚　（起き上る。姿がかくれる）それがね、奥さん……。

夫の声　よし、よし、こいつの知つたことぢやない。さ、出ろ、出ろ。

妻の声　まあ……（と、何かに驚いて）行つてらつしやい。

（格子の閉ぢる音）

妻　（現はる。長火鉢に向ひ頬杖をつく。ひとりでに、微笑がうかぶ）

夫の声　（やや遠く）そこで、おれは十六の少年だ……。

世の中が

変に……

おい、何処へ行くんだ。

同僚の声　一寸、待て……急用だ。

夫の声　こん畜生……早く、しちまへ。人が来るぞ。

（どちらから始めるともなく、二人の調子外れな口笛が、一つ時、縺れるやうに聞えてくる）

――幕――

青空文庫情報

底本：「岸田國士全集1」岩波書店
　　1989（平成元）年11月8日発行
底本の親本：「チロルの秋」第一書房
　　1927（昭和2）年6月15日訂正第3刷発行
初出：「演劇新潮　第二年第三号」
　　1925（大正14）年4月1日発行
※底本の親本は第2刷まで、「岸田國士戯曲集」とされていました。
入力：kompass
校正：門田裕志
2011年12月4日作成
2016年4月13日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ぶらんこ（一幕）

岸田國士

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/